

安心して思いつきり偏食できる関係

4月号で紹介したよしとくん。彼は小

合もあります。食べないと生きていけないのに、食べることが苦痛になる。そのつらさに共感しながら、人間の生を根源から支えている食を、楽しさ、安心をもたらすものにしていくことは、人間発達に関わる実践として、とても重要です。食の問題は家庭でも苦労が続きません。その大変さにもしつかり共感していくことが大事です。思春期頃まで、人によつては青年期でも、おやつも重要な栄養源です。でも、アレルギーや偏食があると、ちよつと買って食べよう、疲れたからお店に入って休もう。ということもできません。メーカーがちがつてもダメということがあり、家にたくさんのストックを置いておく、その商品が廃番になつて青ざめる、という経験をしたことがある人もいます。

学校5年生になった時、白いご飯とデザートしか食べられませんでした。担任の小松さんは、白ご飯「しか」食べられないのではなく、白ご飯「が」食べられると考えて、よしとくんの食の世界を広げるために、まずは「安心して思いつきり偏食できる関係」を大事にしました（詳細は省きますが、よしとくんは5年生の1学期の間に、大抵のおかずが食べられるようになりましつた）。子どものこだわりに大人がこだわらず、まずは安心できるようにすること。これは食の指導に限らず大事なことです。

「食べられるようになりたい」と自分で願っています。でもできないから困っているのです。その気持ちを受けとめ、安心できる人間関係の中で、食べられるものを手がかりに広げていく方が、結果

「子どもたちは「食べられた方がいい」「食べられるようになりたい」と自分で願っています。でもできないから困っているのです。その気持ちを受けとめ、安心できる人間関係の中で、食べられるものを手がかりに広げていく方が、結果

的にいろんなものを食べられるようになるようです。

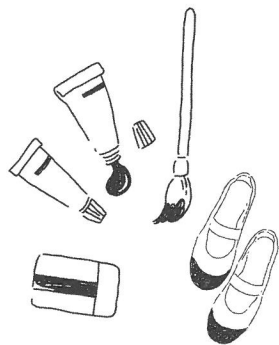
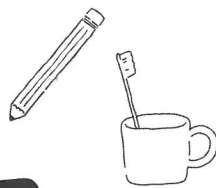
偏食指導は人間関係を食べている

なぜ安心できる関係の中だと食べられるようになるのでしょうか？ 偏食に対する指導を通じて、このことをいねいに考えたのが、大阪の障害児学級（特別支援学級）担任の熊本勝重さんです。小見出しの言葉は、全国の組合の集まりで、ある先生が言われた言葉だそうです。安心できる人間関係なくして、偏食指導はありえない、ということなんです。

熊本さんの指導をみていくと、最初に安心できる人間関係があることが大事だ、というだけでなく、食を通じてその関係がいつそうゆたかに広がっていくことも含んでいるのではないか、と思えます。目が合わない、言葉が出ない、白いご飯しか食べられなかつたりようたくんのことを通じて考えてみます。

小1から熊本さんが担任になり、5月、給食が始まりました。初日はお弁当を持ってきてもらったものの、熊本さんは1日でお母さんに「お弁当やめにしよう。ほとんど食べずに帰ることがあるか

ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学
川地亜弥子

かわじ あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？—発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第4回 ゆたかな人間関係と偏食指導

今月のテーマは「食」、とくに偏食についてです。食育、という言葉は学校にすっかりなじんでいます。が、「何でもよく食べる」ことがよいし、食べ物の好き嫌いは早く乗り越えた方がよい、という前提で指導されていないでしょうか。その場合、強い偏食、アレルギーのある子どもにはとてもつらい指導になります。

給食指導では「楽しさ」「よりよい人間関係の形成」も大事だと確認されているのですが、「何でもよく食べる」ことのプレッシャーの中で、楽しさが後回しになっていないでしょうか。

「何でもよく食べる」より「楽しい食事」を

子どもの発達の過程で、以前は食べていたのに食べなくなり、ついに一つのもの（たとえば、白いご飯）しか食べられなくなる。ということがあります。見た目、におい、触感、食感、味等、五感でしっかり他のものと区別できる、という点で、何でも食べていた時よりもよくなりました。ですからこそ食べられないのです。

人によっては、ある食べ物を口に入ると、まるで針がささるように感じる場